わんぱく時代

おこらぬ会　（一九六三・二）

戦争が終わった昭和二十三年。
どうも、だいぶ時代が変わった。何もかも、勝手がちがってくる。
まあ、ひとつ幾人かで集まって、勉強をしなおしましょうや。
というわけで次のような連中が集まりました。
（以下文中敬称略）
笹本弥左衛門、細谷俊一、設楽美知、笹本益夫、笹本英一、古谷幸三郎、笹本伍助、井梅寛助、細谷春吉、古谷恵三、設楽真一、古谷政吉、窪田幸一、古谷順治、笹本平八郎、田村半十郎、森田孝治、持田改三

永田おこらぬ会

なれないながらも民主主義でいきましょう。
何かあっても、おこりっこなしにしましょう。
それで会の名を「おこらぬ会」としました。
それからずうっと、毎月例会をし、年に何回か旅行をやっています。

塞の神

笹本弥左衛門

昔のお正月には、カルタ、コママワシなどして遊びました。
でも、永田の子どもの伝統は塞の神ですよ。
正月の七日におかざりをおさめるのですが、そのときにみんなの家をまわって、おそなえをあげた紙をもらって歩きます。
その紙を、とし神様へあげた。
玄関へ飾ったおかざりなんかももらってきて、それに色紙を買い足して、注連飾りみたいに切って、塞の神をつくります。

十四日の朝、夜明けを待ってそれをみんなの家に、買ってもらいに歩きます。
川向こうでは、集めたお飾りをたんぼの中へ立てて燃して、だんごを焼いて食べたりします。（ドンド焼）
塞の神を売って歩くときに、その前の年に初っ子があったりお嫁さんをもらった家には、へいそくに金紙をつけて、ふつうより高く買ってもらうのです。子ども心に工夫したものです。
その売り上げは子ども中で分けた。
雪のつもった中を、あかぎれだらけの手足で歩ったもんです。
十三日にはまゆだま（ダンゴ）つくりもあったりして、楽しい正月でした。
でも、その集まった金で部落中の小さい子に奉仕したりもしました。だから、今の青少年より気が利いてたね。
その金で、皆で八王子のかんこうば（デパート）に幻灯機やガバを買いにいきました。あんざい喜笑堂とか、まからず屋という店があったなあ。峠を越して、みんな歩いていったものです。帰りに拝島の乙幡酒屋で御飯を食った。飯が一杯一銭、にしめのおかずが二銭。だから三杯飯が五銭ですんだものです。

そして、〝今映じました画面は……〟なんて、映画説明も自分たちでやりました。
その説明が覚えられなくてなあ。
説明するときに、メガネの人がやると電灯の反射でメガネがピカピカ光るんだな。当時はメガネの人なんて珍らしかった。
それがいいってんで、子どものメガネがはやったもんです。
日露戦争。カチカチ山。なんていうのをよくみたな。

新校舎

笹本　益夫

私が一年生の三学期に、きゅうかんやあらいをかついで、宮本から、今の第一小学校へ越してきました。その三月が開校式でしたね。明治四十一年だったかな。
吾々が一年生のときは、先生は五、六人でした。女の先生は前西先生だけだった。（当時は尋常科四年、高等科四年）
二階の校舎はまだまだですよ。

雨天体操場はあった。式なんか、もうあそこでやったですよ。
冬でも足袋なんかはかなかった。モモヒキもはかない。
塞の神が終わると、赤ん坊をおぶわせられて、お堀ばたのどてで雀追いさ。ほほじろなんかだね。もちを棒の先につけてね。手も足もあかぎれだらけで、ぞうりみたいになった下駄をはいてね。
お店は、当時この辺に二軒あった。明神様へおさい銭をあげる人の帰りを待ってね。それを拾ってまいかけにくるんで使っちゃった人もいたね。
私達の同級生ではなかなか暴れ者がそろってた。
元町長の森田幸造、その近くの森田惣助、笹本重一、清水万吉、矢沢喜曾市なんか同級生でもすごかった方だな。

柳山の芝居

設楽　美知

あれは、大正五、六年ごろだったろう。細谷孫一が親方だったな。

その時分、両舞台っていうのがはやりました。こっちとそっちに舞台がかかってて、交代でやるんだ。それが草花にあって一週間ぐらいであっちこっちした田舎芝居ですよ。
それをまねしたんだな。
「笹本益夫は、明智光秀をやったな」
「夕顔だなのこなたより、あらわれいでたる明智光秀」とかやったもんですよ。
「そだのかわずの鳴く声に」
製糸場の笹本八十次郎の弟のたっちゃんっていうのがいましてね。これは慶応へいったんだが、これなんかよくやった。
長沢の森田春一や村野真一なんかおやまだったな。
二宮からは尾又重一や藤野信一がお師匠さんできてね。
吾々の同級生はおとなしかった。田村信、町田篤一、古谷順治、内田左右二、北田喜一、深沢栄一、細谷真一なんかで、模範生ばかりだったな。

石モッコ

笹本　英一

草花とよくけんかした。梅田屋の武三さんがマルっていう犬を連れてきて、それを前衛にするんだ。マルが豊坂をかけあがんと奴等パラパラ逃げる。吾々は石モッコをカツ糸でつくってそれをまわして投げる。向こうまでいきっこねえけんどね。そうすんと向こうにも御常連がいんですよね。ここが二百三高地、向こうがロシヤで、こっちが日本なんてね。

学校から帰る途中で、みんなおらが家の廊下へ荷物おいて、かけつけたね。

宮本のみこし

古谷　政吉

ずうっと昔は、宮本のみこしを各部落でかつぎまわしだったんだ。俺が六つのころかな。

永田から加美へみこしをまわしたときにけんかができて、ぬりかえたばかりのみこしを、かついでって、さかさにしてひきずっちまったんだ。桑林民部さんとこにでかい茶の木があってな。その茶の木のところへ放りこんでけんかわかれだ。

それで、そのみこしを宮本へしまっちまったんだ。

宿（しゅく）

古谷　恵三

永田を宿というのはね。昔から福生には宿は永田しかなかったんだ。私ら若いときはどこへいっても福生の宿ですといえばわかってもらえたんです。

今の明神様から宮本橋とこまでが、五日市から所沢街道の本道になってたんです。その間がずうっと家が続いてて、そういうところは豊岡へいくまでここしかなかったんです。この宿は昔から横町まであったんですよ。

細谷政太郎が豆腐屋、古谷幸三郎がこんにゃく屋、笹本光造のかじや、設楽美知のみそや、新紺屋もあったしな。

昔は、東京まで何里っていう起点が宿橋からだったですよ。

吾々が小学校に入学したときは同級生が六十五人です。明治三十七年の尋常科卒業が五十四人になって、高等科を卒業したのは男が九人、女が二人の十一人だけです。同級生ではもう達

者な者は少ないですよ。
学校に長くいた細谷市太郎や森田孝治、村野長治、二見新吉、細谷春吉、村尾章介、田村又一、木村弥七、横田寿照、それに田村弘一、先生をやった細淵酒造十郎なんかが同級生です。
体操のときに、きゅうかんというのを使って両方のたまをあてっこしてあそびました。そのきゅうかんで廊下で遊んでよく先生におこられたものです。体操のときにそれで頭をごつごつやられたりしてね。
昔の卒業式は、免状もらいに学校にいってね、そこで免状もらえば卒業。もらえねえものは落第でした。泣いて帰ってくるものがずいぶんいたもんです。
前に教えてくれればいいものを先生は全然教えない。
免状式っていえば、そりゃあ家の人は子どもが帰ってくるまで心配でした。でも落第してもみんなそのままいったね。通信簿なんてえのはなかったね。

タルみこし

窪田　幸一

大正十五年かな。その時分、福生にはみこしはなかった。
大正十二年の震災のころ永田へ伝染病がでた。それでお祭りをやりだしたんだね。
私なんか二十歳ぐらいだったが、当時の青年会の顔役はこの笹本益夫や設楽美知なんかだった。吾々がみこしをつくるっていったら彼等に反対された。
それなら来年から川掘りをやんめえやっていってね。本町へいってる岸茂や設楽真一なんかと吾々が親玉になって青年会とはかけはなれてそれを実行したんですよ。だからお祭りは永田が一番始まりだった。
昭和五、六年になって停車場（本町）の高橋時計屋さんが自分でみこしをつくって、停車場の青年にかつがせたんだな。
吾々の同級生は川窪金吉、村野末男、小川隆吉、村尾四郎、田村成一、古谷新喜、村尾熾作、矢沢軍三なんか元気だったな。

終戦っ子

設楽　真一

私なんか日露戦争の終戦っ子です。(明治三十九年生)今とちがってそんときは人数がすごく少ない。福生で同級生は、小学校のとき四十五人ぐらいです。

高等科へ上ったのが男が十一人、女が六人だったかな。

その当時福生小学校の全校生徒が三百三、四十人だったでしょう。

ベースボール

高等科になると十七、八人だからチームを二つつくって試合やるのに一人でも休むとだめだった。よくやったね。昔は野球じゃなくてベースボールだ。

村尾純ちゃんがね、バットをふるとき秋山猛君の前歯を折っちゃった。それでしばらくやらされなかった。(設楽美知)

宮本の庭でやってんときも、二見周吉が細谷平蔵の頭打っちゃってね。杉の丸太の裏っちょを切っただけのバットですよ。だから、今でも平さんの頭にはげがあらあね。平ちゃんが〝あいてってえ〟といったのが、今でもみえますよ。そんなとき野球を教えた先生が、吉野作蔵先生ですよ。(笹本弥左衛門)

多摩川

永田橋のわきの水門の下に下りて水門をみると、どうしてこんな高い所に水門ができたのかと思いますけど、あの水門の水を入れるのにあの前の所の砂利をはいて、あそこへ水を入れたのをしっています。

明治四十年に昔の水門が大水でひっくり返っちゃって、この下のたんぼへも水がどんどん入っちゃって、半鐘をついで村中大さわぎしたことがあるんです。

四十三年にも大水が出た。その大水の時です。井上久右衛門さんのすぐ下に、今本町にいるカネヘイさんの家があって、そこまで水がおしよせてきた。そしてそこのおじいさんが押入れに入っちゃって、俺はこの家といっしょに死んじゃうとがんばった。水はおしてくるし、仕方がないから大勢でおじいさんを引張り出したんだ。(笹本弥左衛門)

渡船場には大きい船と小さい船があった。(永田橋)馬力なども馬と車と別に乗せて渡ったりしたものです。渡船料は人が一銭、車は二銭くらいだったな。俺が知ってるので一番高かったのは人が十銭だった。はなに一人、ともに三人ぐらいでこいだかな。

大正の末まであったなあ。
笹本多吉、佐藤三五郎、佐藤平七、細谷武吉なんていう船頭さんがいました。（笹本英一）
その頃、長徳寺の下の方に島があって、うらさんが大水のときそこへ残されちゃってなあ。
笹本富吉、笹本吉之助や、あっちゃん婆さんなんかで船をかついで新堀橋までいった。そこで船をお堀りにおろして川崎下までいった。その舟をまた川に移して島へこぎよせた。
その時は夜通し、長徳寺の墓地からこんぴら山まで、あっちでもこっちでもかがり火をたいて見張ったりして、大さわぎだったもんです。（古谷政吉）

永田組の木やり

笹本　平八郎

永田の木やりの保存会をつくるべきだな。
テレビなんかでも木やりはいろいろやるけど、永田と同じのはないね。昔、笹本こさきちじいさんが永田の衆に教えて、ここにいる古谷恵ちゃんなんかがおそわって、それを又若い衆にひきついでいるわけだ。

なんとか考えてもらいたいことだね。

（終）

生まれは明治のしっぽです

（一九六八・二）

（出席者）
井上正治　田村政一　竹島子女　田村ソフ（井上）　貫井喜代次

小学校のころの同級生。いつまでも、こんなにいい仲間はない。年がたてば、その思いは一層強くなる。
この人たちの同級会は、毎年行なわれ続けほとんどの人が出席する。
生まれが、明治四十三年から四十四年で、明治生まれの名残りのほう。
小学校の入学は大正六年。

陸上競技参加のはしり

○三木先生の思い出が一番強いな。げんかくだった。こわい先生でなあ。

生まれは明治のしっぽです

それまで、体操の時間だっていまでいう運動のようなことはしてなかった。かけっこだって着物でやってた。

ところが三木先生が、男は上は天ジク、下はサルマタの運動着。女は、メリケン袋をこわしてつくらせたシャツを着てゴムバンドのついたパンツ。それで走りまわされた。

○みんな太田屋さんでぬってもらったね。寒中だって、そのシャツ一枚にハダシでやらされましたね。

○ここにいる、田村、それに森田新平、森田正雄がはやくてな。女ではソフさんがはやかった。一級下にカイノ（福井繁次郎）がいて、これが我々といっしょにかけて早かったな。

○立川の諏訪神社で三多摩の陸上競技大会があって、わたしもそれに参加したんです。福生の学校がそういう競技に参加したはしりだったそうですね。わたしは走り幅跳をやりましたよ。

おとしあな

○いたずらや、でたらめをやったのでは、農業の時間というのが思い出多いな。

○おとしあなで失敗して、おこられたなあ。

○一小の昔の裏校舎のところに農業小屋があって、そのわきの通路を、先生が必らず通る。それで、ある日の農業の時間が始まる前に、その通路の真中にあなを掘ったんだ。うまく上へ土をかぶせて、我々はそのすぐ向こうの垣根の石に、ずらりと腰かけて、先生のくるのを待ったんだ。

ところが、笹本君が便所へいってくるといって、その帰りに先生が見えたからあわててもどってきて、そのあなへ落っこっちゃった。そこへ指田先生がきたものだから、〝人をだましにかかったな〟って、いまでもその文句を覚えてるよな。えらいけんまくでおこられた。

○いまのプールの所も実習地だったな。みんなで石を、ニンヤの庫へ投げっこして、近くのおじさんがおこってきてな。あのときは先生もいっしょにおこられたな。

○マグソひろいによくいったな。そのころは、五日市方面から材木や木炭を、福生の駅へ集めて、貨車で東京方面へ出した。その運搬は、馬力だったんだな。
それで、福生駅前は馬の往来がはげしかった。だからマグソもたくさん落ちてた。それを農業の時間に集めさせられて、それで肥料にしたんだ。
○ホーズキトマトって、ぶどう玉のようなトマトもつくったな。雨天体操場の隣の農場だ。
○その実習畑でつくったものを駅前の方へ売りに行くんだ。大八車へ積んでな。ナッパ、大根カブなんか。あるとき、俺が先頭でその売上金を使っちゃった。
橋本パン屋ができたてでな。ジャムパン、アンパンなんてかざってあるが、そんなのふだん買って食うことができない。とうとうその金、みんなで全部使って、パン食っちゃった。
その日は、夜まで学校へ残されたな。

米の飯

○学校へ弁当をもっていった人は幾人もいなかった。みんな昼休みは家へかけていった。
俺なんか（貫井）牛浜までだから忙がしかったよ。銀座通りのところを走ったが、当時はまがりくねった細い道でな。人家は飯田ロクロ屋から向こうは高橋頼四さんの所まで、まるっきり無い。
雪の日なんか、ハダシになって、腰のところに下駄をしばりつけて夢中で走ったわ。
○雪の積もったような日は弁当もってったな。それも米の飯じゃなくて、ヒキワリの麦飯よ。おかずだってろくなもんでないよ。冷たくてな。
○正月には、餅をもってきたな。

ストライキ

○五年生のとき、役場へみんなでおしかけたろう。当時の役場は、清厳院の坂下で、高崎治平さんが村長のときだ。
○その時の受持の先生が、あんまりきびし過ぎるって、五年生で役場へおしかけたんだよ。
○女ばっかりひいきにした、なんていったりしたな。
○それから、一回は、みんなで教室を抜け出して、いまの一中の辺まで逃げちゃった。そのころあの辺は一面雑木林で、まごまごしてると帰り道がわからなくなった。
○その時だ。俺は木に登って、カラスとゴイサギの巣をとった。
音楽の時間に、三木先生に、荒城の月、六段のしらべ、なんて教わった。オルガンの二部合

奏も習ったよ。

〝ウーグイスキナケ、ホーケキョホーケキョ、ウーメガエコソハナガヤド〟っていうのなんか、いまも同級会に、みんなで唱うな。

○俺は、一週間一人で教室の掃除をやらされたことがあったよ。

ある日、掃除の最中に、廊下においてあった掃除バケツを学校中まわってかたっぱしからひっくりかえしてしまった。

それから先生につかまって。あれはつらかったよ、いたずらがいたずらだったからしかたがなかったけどな。

○あのころは、教室には火の気はまったく無かったのですね。それでも冬中、たびをはかなかった子もいました。職員室にだけ、大きな火鉢がありました。

○俺は冬でもハオリがなかった。

休み時間に、ハオリのうしろをつかんで追いかける遊びをしたが、俺はそのハオリがないからいつも一番うしろだよ。

○休み時間は、すぐおしくらごんべ。寒かったからでしょうね。

そろばん

○そろばんは、算術の時間にやったけどどの先生でも教えたが、私たちの先生はそれを教えてくれなかった。だから、我々の同級生はみんなできなかったですよ。社会へ出て、あのころはそれで困りました。しかたがないから、家でおやじなんかに頭を叩かれながら習いました。

修学旅行

○六年生のとき、日光だった。イヨガスリにハカマをつけて。

○俺なんかめくらじまよ。

○いい家の子はゴム靴はいてな、下駄でいったのが多いよ。

○しょいかばんでな。

○男の先生はつめえり服で、女の先生は着物にハカマで。

○青梅線から池袋に出て、赤羽から東北本線に乗りましたね。

お祭り

○まあ、あのころの子どもの楽しみといえば、正月の米の飯。
それからおてんのう様だ。
○夜、まんどうづくりに行ってな。それが先生に知れると、修身に丙や丁をつけられたな。
○志茂というのは中福生、牛浜、原ケ谷戸、それにいまの志茂あたり。ぐるっと、みこしをかついでなあ。家が少なかったから一軒一軒寄って、それでおさい銭をもらって。なかにはなかなかくれないっていうので、へいにみこしをぶっつけたりした。
○まったく家が少なかったな、暗いところをわっしょい、わっしょいって。
○当時は子どもの数も長沢なんか多い方で、本町は少なかった。本町の子どもなんか小さくなってたが、いまはその逆になったね。
○おさい銭を、高等二年が親玉で分けるんだ。そのお金で、ラムネや氷水を飲んだ。そして、お祭のうちあげで、集会場で大きなかまで飯をたいて、しょう油をかけて、しょう油飯をつくって、それがうまくてな。米の飯でしょう。
○当時、いまの多摩川べりのたんぼなんか、ほとんど桑畑だったんです。生糸がよかったんだな。それでたんぼが少なかった。米もほとんどおかぼで、まずかったが、農家にとって、米は貴かったですよ。

水車小屋

○まだ水車がまわってたな、そこで米をついた。
○中福生は、村野弘さんの下の方。牛浜は高橋弘喜さんの下。永田は井上久右衛門さんの下。島田弁護士のところにもあった。

成人後

○しかし、あのころ先生はきびし過ぎたようだけど、それが軍隊などにいって、役にたった、と感じましたね。
○それは本当ですね。よかったと思ってますよ。
○どんなにつらくても、夜遊びなんかは平気だったな。
○冬は五時ごろは暗くなるでしょ。だから冬はよかった。夕飯を食うとすぐに自転車なんかで出かけるんですよ。
瀬戸岡、高月、平井、小川、砂川、三ツ木あたりまで出かけて、夜中の十二時ごろが帰りの時間です。

○夏なんか朝起きられなくてね。畑へ草むしりにいくと、桑畑のかげでひと寝いりですよ。
○あのころは、夜の通りを、カラコンカラコン若い衆の下駄の音が賑やかでしたね。（終）

うっちゃんとおーたんとその配下たち

吾々もむかしは、こんなに無邪気なよい子でした。

出席者（敬称略）
石川武正、内田久吉、小山京太郎、島田福三、清水喜一、島田昭三、滝島総一郎、竹島正一、田村昌平、中野末男、山崎良之助、山崎茂男

昭和初期の駅前

○ときは昭和のはじめごろ。
ところは福生村停車場（本町）。
青梅線の電車は日に数回、福生の駅を一箱ずつとおっていく。

うっちゃんとオータンと

乗り降りする客人は幾人でもない。
ときどき、しかさんの人力車が、お客を乗せて走っていく。
駅の前、北側の家並びをみていくと。
丸太のへいにかこまれた、かねますが一番はじめ。棒きれでその丸太をカラカラと音をたてながらとおると、そのはじにガソリンの赤いスタンドがあった。ハンドルをぐるぐるまわしてガソリンを汲むと、ボコボコと白い液体があがってくるのをみるのがたのしかった。（いまのマルフジフードの所）
その隣りが橋本石屋、笹本金物屋、次に土蔵があって、その隣りが福本屋旅館。道路をへだてて、いまのふんすいのところが高い鉄骨の火の見。その下に夜番小屋があって、そのころのわん

ぱく連の何よりの集会所になっていた。

その奥が雨宮鉄工場。床ばの寅さん。寅さんへ頭をかりにいくと、たいてい寅刈りにされるぞといわれていた。次が兵四郎さんの家。おやじさんはいつも道路に面した縁側で日向ぼっこでコクリコクリ、おばあさんはバッタンバッタンといつもはたを織っていた。(現田村書店)

そして、さくらぎのかっちゃん(かさや)で、その両家の間の道ばたに井戸があった。

かさやの隣りは多西屋(のちのパンや)そして竹島下駄屋。

それから高橋時計店、井上セトモノ屋。細野石屋とつづく。

学校へ入る道を越して、岩田屋書店、池谷呉服屋、井上時計店、木村健ちゃん、加藤自転車屋、太田屋足袋店。細い坂道の次が浅見建具屋、にんや、坂から一段下りたところが田村運動具店とつづいていた。

駅前へもどって南側は、

福田屋、しかさん、のんきなとうさんの友野平八さん、ちかみせ、堀田薬屋、かねへんさん、町田ハリ医。

銀座通りを越して、梅田屋、石川呉服店、上州屋(建築)の前が空地で、それから中野洋服店、竹島洋品店、魚忠、島田足袋店、小林豆腐屋、しなそばや、石川下駄屋。学校前の通りを

へだてて、中森菓子屋、二見魚屋、市川かじや、中村八百屋、豊月堂、尾崎屋、そして、いま埼玉銀行のあるところは、石垣を高く積んだ高台の空地になっていた。

道路には四寸角を青地にぬった街灯がたち、まもなく東盛舎のバスが、この道路を、駅から平井まで走り出した。

うっちゃんの台頭

そのころのこころのわんぱく連。親分格は、細谷のたもつさん、かさやのヒーケン、小山の京太郎さん。

○たもつさんはおっかなかったなあ。みんなふるえあがってたなあ。

○良ちゃんが、かさやの井戸のところで、水を二十杯のまされて、鼻からも水をふきだしたなあ。

○みんなで三月ごろ水あびさせられたり。

○俺(中野)はな、よくつかまってな「コイチコイチのタイヨーパゲ、てる日くもる日グリグリグリ」って、わざとコイチさんの前でいわされて、それでけんかをやらされたな。

——そんなときに、子どもたちの間に、貫録十分の頭領が一人出現した。——

○たもつさんもうっちゃんにはいちもくおいたんだな。なにしろ子どものときから貫録あったよな、柔道も強かったし。
○ある日、うっちゃんが一円のMSカメラを使いだしたんだな。シャッターおして、ゆっくり一、二、三って十数えるまでじっとしてねえとだめだったな。それで写真ブームがまきおこったよ。
——そして、うっちゃん（島田福三、男子専科シマダ）配下のメムバーは——
おーちゃん（竹島桜之信——タケシマヤ洋品店）ひちゃん（中野末男——ナカノ洋服店）益坊（竹島益夫——元一小PTA会長）良ちゃん（山崎良之助——山崎製麺）ゴロさん（石川五郎）ターチャン（石川武正——石川）昭坊（島田昭三——シマダ）ショッペイさん（田村昌平——うめだ肉店）茂坊（山崎茂男——珠算学校）等。

かたや仲通りのオータン

そして、表通りのうっちゃんに対抗して、仲通りにも一人の英雄が出現した。オータン（滝島総一郎、大日産業社長）である。
そしてその部下たちは、

原島誠之助、山崎角太郎、桜沢春一、前田耕作等。
○俺（中野）と原島と、多摩橋までかけっこさせられてな、俺はかけっこはのろかったが、長いのはわりとつよかったんだ。原島が負けたのよ。おかげで原島はオータンに罰くってな、オータンの妹の子もりを一カ月やらされたな。
○そうよなあ、当時は子守りがみんないやでなあ。いまの子どもが勉強やれっていわれるように、昔は子守だ。なんとか逃げることばかり考えてな。

スポーツ

○いまの八町内のところにグランドができて、その開場式に子ども野球の試合があってな、ナイトとホクトがやったのよ。
ホクトのピッチャーが田中政男、セカンドが田村芳夫（田村建設）でな、この二人がうまかったなあ。
ナイトはきーちゃん（清水喜一）が投げて、キャッチが前田一良さんよ、あれんときはナイトが負けちゃったな。
でもなんたって、きーちゃんは、かけっこでも、野球でもなんでもすごかったから、表通り

と仲通りと、とりっこだったな。いまでいうボスカウトだ。
○表通りはゼット少年団と命名してたな。
「緑のとおき青空に、青の旗風ひらひらと……」なんていう団歌もちゃんとあったんだ。少年クラブなんかからぬき出して、歌詞も曲も自分たちのものを作って歌ったんだな。うたってみるか。
（一同合唱）
○そのころはみんな自分たちでつくったよな。うどんやのまえの通りでかけっこやったり、きーちゃんの裏の庭で運動会やったりして、それで優勝旗を出した。あれだってみんなでつくったものな。
○加藤（高橋時計店）のおやじなんか青年の神輿つくったしな。

滝島と桜沢の決闘

○しかしこの中じゃあ、滝島君が成功しちゃたなあ。
○昔は仲通りは、表通りより、いっかく落ちてたんだがなあ。
○仲通りは、子どのけんかに親が出るって話だったよ。

○いやそれは逆だ。俺（滝島）とけんかをした相手は、たいてい親がでてきたよ。
あるとき桜沢とけんかしてな、むきあって石をぶっつけっこしようというわけだ。一対一の決闘よ。
やつが俺のおでこへぶっつけて血が出てな、むこうも肩をやられたんだ。いまでも、ここのところに傷があるのがそれだよ。
ところが奴のおふくろが信心しててな、二人で連れてかれて前へ座らせられて、カチッカチッって何かやってな。神棚の一升びんの水をくっつけろっていうんだよ、傷口へ。まいったよ。
とにかく昔は仲通りはたいしたものでしたよ。
田村都議のところにつりぼりがあって、野口酒屋の前に銀世界って射的場があって、細谷接骨医の前にお湯屋があって、紅林なおさんで、ゆのみちゃわん一杯一銭の、べったら焼きがうまかったなあ。

無邪気だったよ

○俺（田村）はオーチャンにまんじゅうとられたよ。まんじゅうの袋をもって遊んでたら、オ

ーチャンが雨宮の前の井戸の中を見ろっていうんだ。あとで気がついたら、まんじゅうがなくなってた。
○幻灯会をよくやったな。うどんやの二階やオーチャンの二階で、でたらめな弁士をやって、
○前にいったボスの中でな、いじの悪いのがいて、それにつかまると千まで数えさせられるんだよ。調子いいやつならムニャムニャってやっただろうけど、とにかくいまとちがって正直だったから。千やってると日が暮れちまう。二年や三年坊主が千までは大変だったよ。それやんなきゃ帰されねえんだ。
○穴を掘って、その中へ汚いものうめさせて、みんなにおがましたり。
○無邪気なものだったなあ。
○のらくろ、信州桜之助、ああ玉杯に花うけて。
○まもなく紙芝居がよくきた。
○イエス、ノーなんてのも、やったな。
○十二天に草間実のロケ隊がきて、みんなで見にいった。
そして、すぐまねして、国定忠治がはやったり。

四　季

○二月のはつうまの日は、正一位稲荷大明神の旗をつくってな、パンやのうらのお稲荷様へあげて、うどんやのうらへいってみんなでメザシ焼いて食ったな。
○二月といえば
「くもにそびゆるたかちほのーたーかねおろしにくさもきも……」だっけ。
○高等二年は薬師様へいっておくもつをもらっただろう。
○そのころは、雪がうんと降ってな、竹を割ってスキーをつくってあそんだな。
○竹馬も高いのをつくったな、棒の先へ足袋つっこんでよ。
○たこあげもいそがしかったわい。いまの志茂あたりへいけば家もねえし、電線なんかねえから安心してあそべたわ。
○三月は学芸会よ。お節句の日で、ずいぶん寒かったけどな。
○羽村の小学校に講堂の立派なのがあってな、あそこへいって歌をうたったよ。
○「ゆーきや　こんこん」
「うーみはあーらうみー」
○あのころの学校は、福生だって音楽室もあって、体育館もあって、けっこうなものだったん

だな。体育館は床がコンクリートだったけど、冬だって、そこで足袋もはかねえ子もいたよ。あとで、あぶねえからって床板はったんだ。
○春風が吹くころになると、子どもの世界はいそがしくなった。
○ひばりの巣っことりだろ。
○十二天へのぼってな。豊坂や山の上は、そのころつつじがいっぱい咲いたな。
○四月になると街には、のぞきメガネがきたっけ。
○それからゲンマイパンのホーヤホヤだろ。あれは二銭で、五銭のは、カリフォルニヤのブドウいりだよ、なんて。
○それから遠足。
「なくやひばりのこえうららかに、かげろうもえて……」
○一年、二年は十二天。
○三年、四年が、みづほのろくどう山か、拝島の大師様。
○五年、六年は農事試験場か、高幡の百草園。
○それがぜんぶ歩きだったな。
○電車でいくなんていうのは、すごいデラックスよ。六年が電車で御嶽なんいうと、前の晩は

ねむれなかったな。
○楽々園というのもいったなあ。
○夏になると、これはもう水あびとよう釣り（魚釣り）。
○柳山はハイクラスでな、チビは明神下の方よ。長徳寺のところを下りていったな。俺（山崎良）と益坊なんかと泳ぎから帰ろうとして夕立にあった。おっかなくなって逃げてきてよ、永田のところで、でかいけやきの下で、少し雨宿りしてすぐにかけ出したんだよ。そのすぐあと、そのけやきに雷が落ちてなあ、あれはおっかなかった。ほんとのいっしゅんの差だったな。次の日にいってみたら太い幹が黒こげだ。
○夏休みはラジオ体操へいってあとは水泳ばかり。
○水あびにいきながらな、豊月堂の店の中へ入ってみんなで、「売ってくれー」っていって、さっと逃げちゃうんだ。お店の人が出てきて、きょろきょろするのが、おもしろくてな。
○秋は運動会。あのころは一年生でも百米かけたよ。そこへいくといまはだめだなあ。体力ねえわけだよ。
○運動会の終わるころは、青年学校の生徒の演習をやったな。煙幕をはってとつげきやって。
○それから秋は、でっぱり松できのことりや、養狐園（いまの横田基地内）の方へ栗ひろい。

○それから鈴虫なんかの虫とり。
○少し寒くなると兵隊ごっこ。八番線のサーベルさげて、赤い肩章つけて。あれもみんな手づくりだった。ターチャンや昭坊はいつも二等兵よ。
○昭坊がつかれると、俺なんかおぶわせられたな。
○枯れ草で小屋をつくってな。
○冬になるとおしくらごんべ。いってきベース、川中島。
○暮の市もなつかしいなあ。
ピーピーって音が今川焼きだろ、あれが聞こえんと、市だなあっていう感じだったな。
○福本屋の前へ、たぬきなんかの形のあめざいく屋がきて。
○梅田屋の前はでんきわた。

学校の思い出

○「なかのひとりはきみにしてなかのひとりはぼくなるぞ……」
「ゆきふりみだるるふゆのあしたにかぜなおさむき……」
――こんな昔の教科書のもんくを中野さんがよく覚えていて暗誦。――

○よく覚えてんなあ、すごいなあ。これは驚いた。
○いやこれはな、夜番小屋でうっちゃんがみんなに覚えさせたんだよ。
○へええ、なかなか善政をしいたんだな。
○俺（島田福）がよく覚えてんのは、本通りをぎえん金をもらって歩いたことよ。ききんか何かで困ってるって聞いて思いたってみんなでやって、新聞社へ届けたんだな。そして新聞に出て、いいことをしたなんて思ってたら、学校の朝礼で校長先生がいったのが、「先生に話をしてからやれ」っていうようなことで、ほめられたのか、おこられたのか当時はわからなかったなあ。
○当時の先生も、細谷、舘先生など、みんなとしとったよ。

（終）

故郷　なつかしさのあまりに

内田　久吉（浦和市）

故郷の皆さん、ご無沙汰しております。私は小学校を卒業後すぐに故郷を離れましたので、ときたま帰郷の折りに接する、発展した故郷の姿に戸惑うことすらあります。
町づくりに奮闘しておられる在郷の方々への感謝の念は申すまでもありませんが、反面、昔

を偲び当時の状況と思い比べるとき感慨無量なものがあります。

先日、わんぱく会と称する悪童時代の会合に招かれ、旧友と懐古談に興じ、刻のたつのも忘れる楽しい一夜を過ごしました。

その席でのウッチャン、オーチャン、キーチャン、リョーチャン、ヒチャン、益坊、昭坊、ヒーケン等々、子ども時代の呼び名は年齢を忘れさせてくれました。逸物ぶりを発揮したオータンも元気な姿を見せ、昔のいたずら行状記の復誦をしました。

その折り、珠算学校の山崎さんの、これら懐古談などの出版のことを承り、往時を偲び詩を作りました。巧拙は不問に願い、共鳴同感される方がおられましたら幸甚に存じます。

永田橋の竣工後間もないお彼岸の日に、約三十年ぶりに故郷の山野？　を逍遙した時に浮かんだことをまとめてみました。

1、破れた蛇籠も懐しい
　想い出残る多摩川に
　小石を軽く投げこめば
　水面に拡がる過ぎし日が

2、ハケタの小川で蜆とり
　田圃の畔に蝗追い
　れんげの上でたわむれし
　幼い昔が　ありありと

3、多西に渡る渡船場は
　モダンな橋に変れども
　板の軋しみを偲びつつ
　登るとよ坂　十二天

4、急な石段百幾つ
　松も懐し頂上で
　故郷静かに見渡せば
　増えた甍に陽の光り

5、爆音轟く横田基地
　ネオンの彩りまばたきて
　雑木林の跡もなく
　鈴虫いずこぞ便りなし

6、ままごと遊びにかくれんぼ
成婚記念碑よじ登り
丹下左膳が刃振る
往時の楽園　不動さま
7、羽村の堰は変らねど
弥生麗の花見どき
君と眺めし上水の
桜の幹にほこらあり

(1)柳山や多摩川に関する思い出は多い。魚とり、水浴び。学校としての行事も盛んであり当時が懐しい。大雨のあとの大洪水のとき、福ちゃん（田村福一氏・田村書房）が、渡船場の少し上流から多摩橋近くまで、渦巻く濁流の中を平常と変わらぬ態度で力泳されたことを、いまだに覚えている。

(2)れんげの咲く季節。日曜日には福三さんとともに、近所の一連隊を引き連れ、弁当持参で自転車で行き、一面に敷きつめられた花のジュータンの上で丸一日遊んだものだ。そのとき、橋本パン屋の俊ちゃんを私の自転車に乗せて、お駄賃に小母さんからおいしいパンを頂いたことが思い出される。

(3)草花・多西等を結ぶチャチな造りの渡船場の橋は、現在の堅固な永田橋同様、生活のための要路であったのだが、子ども心にはその恩恵の度合はわかっていなかった。大水の度ごとに敷板をはがす橋、十二天にいくとき渡る橋でしかなかった。しかしすぐ下をきれいな水が豊かに流れる。軽やかに泳ぐハヤやメダカに小石を投げつけたこともあった。

(4)石段の数百二十五、数えるとき途中でわからなくなり何度も上下した。頂上のお宮には必ず拝礼、当時の教育は自から頭べを垂れさせた。（ただしおさい銭は上げたことはない）このお宮の右手上に大きな松が三、四本あった。たまたま当地で行なわれた映画のロケーションで、その松の木を背景にして忠治に扮する俳優が真力を振りかざすアップシーンを見ていた人も多勢いたはずだ。クラス一同衆議の結果、西潟先生の結婚祝に贈る松の木を物色したところは、この丘のどの辺であったろうか。

陽に映ゆる赤・青の屋根。藁ぶき屋根は減り点々としか目に映らない。人口はどのくらいになっているのだろう。

(5)横田基地に離着陸するジェット機の爆音が騒々しい。基地周辺を賑わす歓楽境のネオンのいろどりは男心をくすぐるであろう。

日光街道と残堀街道の交叉する右手の雑木林には、秋を表徴する鈴虫の住みかがあった。夏休みの終わり頃から幾度となく採りに行く。折よく訪れる東京の叔母さんの土産に上げてお小使いが預けるのも楽しみの一つであった。現今のアルバイトのようなものだが、素朴で豊かな風情があった。

(6)枕を背負って女の子と遊んだこともある。

当時（小学四年生ごろまで）私たちのグループは、戦死された大野良平さんが最年長者で、大野一家なるものを形成し、私はその代貸の地位にいた。兵隊ごっこ、チャンバラなど他愛ない遊びで悪質ないたずらはしなかった。三角畑、不動様の境内が主な舞台で、チャンバラの出し物は忠臣蔵や国定忠治が主なものであったが、遊んだ時期の追憶を容易にするため丹下左膳に置き替えた。丹下左膳の映画が封切りされたのは、小生が東京へ出てからのことなので、この頃は六、七年サバを読んでいることになる。

(7)羽村の堰、花に水、堤の若草色を添え、背景に緑の丘陵を配し遠く奥多摩の山々に連なる、巨大なる名画と言うべし。人の雑踏することなく、大気澄みて清遊の眺めであったが……

『君と眺めし上水の……』

君なる人物は島田のデブさんである。これが初恋の人、あるいは意中の女性とかであれば、もっとよい詩ができたであろうに……。残念である。

文化とともに故郷も発展しました。在郷諸賢のご尽力によりさらにさらに発展することでしょう。

いたずらに過ぎ去ったことを思い、べんべんとする愚は避けたいが、故郷を遠く離れたものには、その変遷は嬉しくもあり、またものの哀れもあり、一入感慨に耽るときがあります。

（終）

折りにふれ　遠き故郷　如何にある
友のあだ名よ　多摩のせせらぎ

（一九六一・一二）

吉岡　喜代造

大いちょうの思い出

熊川小学校全校生三百八十名。これはいまの福生第二小学校の三十数年前の生徒数です。

高等科一年、二年が男女一教室で、先生一名。歴史には、明治天皇が出たり神武天皇を教わったり、地理、理科、国史等、成績がよければ、高等一年が二年を負かしたりで、てんやわんやでした。

農業の時間には、長岡からきていた小野先生の目を盗んで、畑地で三段跳びや走幅跳びをして叱られたり、時には女生徒を一人残らず山の方へ追い上げて、全員職員室の前へ立たされたりしました。

わんぱくざかりは尋常四、五年当時だったと思います。野田先生に教わっていた時、今は故人の加藤繁夫君と、教壇の上で大相撲をしている現場を、先生に見つかってしまいました。それで皆の前で二人のはちあわせを、力一杯させられたのです。今でも思い出すと、目の中で火花が散ります。

学校へ行く道で仔猫を拾い、それをかばんの中へかくし、机の中へ入れておいた時です。私が猫の声が気になって下ばかり向いていたので、伊藤先生がそばにきて見つかってしまいました。私が猫のくびをつまみあげると、先生は私の耳をいやというほどひっぱりました。私が痛いと泣くと、猫もニャアニャア泣いて、一人と一匹が泣きなき教室から追い出されたりしました。

多摩川で遊ぶときは、川向こうの子と石合戦をやりました。当時はずいぶんジャカゴがあってそれをたてに戦いました。司令官はふだんはいばれるのですが、こういう時はかくれてばかりいられないで頭をあげて指揮をとるので、頭の上に三はりもぬうほどの傷をつくったり、足から血を出して、やっと家に帰りつくようなこともありました。

昭和十七年八月二十八日。北支山東省の石化で、同級生の持田長次と同じ隊で激戦にあいました。二人で、昔の石合戦を思い出したなあといいながら、軽機銃で戦いました。中隊長以下ほとんど全滅した中で、私は命拾いしました。しかし持田はここで戦死をしてしまったのです。

今、小学校の東にある大いちょうは、昭和八年に、内出末男と吉沢克己君に私の三人が、十五銭出しあって、茶わん桜と二本の苗木を買ってきて植えたものです。茶わん桜はすぐ枯れたが、いちょうは今もどんどん大きくなっています。

同級生のうち三分の二は、この前の戦争で死んでしまった。死んだ友だちも、きっとあのいちょうのある学校を思い出してくれるだろうと思います。あのいちょうを植えたころは、同級生も皆でよく暴れたけれど、あのころの校舎も変わってしまった中で、昔の友だちの思い出もなくなっていくような淋しい気がします。

（終）

鮎が人にぶっかってきた多摩川だったのに

（一九六五・八）

古い〝ふっさっ子〟のわんぱく時代の思い出の多くは多摩川のことである。五十いくつのおじさんたちがあつまっての話です。

渡船場

○いまの永田橋の辺を、ごく最近まで渡船場といってたが、大正の時代まではあそこは本当の渡船場だったんですよ。吾々が子どものころは、手車を舟につんで川を越せたんだから。

○多摩橋の下の方にもそれがあったな、二宮の岡田機械屋の下の細い道は、そのときの渡船場への降り口だったんだ。

○あの多摩橋ができたのが関東大地震のころだった。運送が二台とおれる橋だからでかいもんだというんで、おどろいたんだ。

○それまえは大水でも出ると舟が出ないんで、青梅の万年橋までまわんなきゃあ川向こうへいけなかった。

○そのころの船頭さんで、森山に荒井九兵衛さんが健在です。若い船頭さんでしたねその頃。

○ロープを両岸へはって舟がいききしたことがあったね、それは新しい話だ。

○昔は奥多摩から材木を多摩川へ流したんだな、羽村のせきのところにはいかだおとしもあったし、渡船場の橋は材木が流れやすいようにつくってあった。

○渡船場の橋は大水がでるとひきあげられるようになってた。そのころは大雨があると、これは水が出るぞってんで橋をあげといた。川床が高かったから、大水も岸から岸へ川一杯にあふれたようだ。

奥多摩からイカダを流して、それに乗ってきてこの辺に住みついた人も多い。高月に沢井という部落があるのも、奥多摩の沢井の人が住みついたという話だ。

○渡船場の橋をわたるに、自転車幾銭、徒歩何銭で払ってわたったのも最近だな。

楽しみは川遊び

○昔は川っぷちの子がいばってましたよ。日曜日や夏休みの楽しみといえば川で泳ぐことだ。停車場（本町）の方の子どもがくると、永田の子どもに水の中で足をひっぱられたりしていじめられたわ。

○川向こうの子どもとモッコ（石をカツ糸でしばって投げる）の投げっこもよくやったな、とし上の連中がそうやったから、下の連中もけんかの種がなくったって川向こうの子どもをみれば

投げっこをした。子守りさせられながらだから、うまく投げられない。おぶっていた赤ん坊を砂利穴の中へ寝かせてやったもんだ。砂利穴へ赤ん坊を忘れて帰っておこられたりしたな。

○このごろの子どもが砂利穴で死ぬなんていうけど、昔の砂利穴は手ぼりだから浅いもんだ、いまのは機械でやられるからたまらねえや。

○砂利ふるいなんて仕事もあった。子どもが学校をサボッて砂利ふるいをやったりした。

○そのころは水がきれいで鮎なんかいっぱいいた。セズリでどんどんつれたもの、足へぶつかるほどいたな。釣ったのはふところへかくしたりして楽しんだなあ。

イシブチ・フカンド

○カジッカ、スナメ、コト、ナマズ、ギバチ、なんてとれた。イシブチでハヤがなんぼうでもとれたもの。流れのところにはくいで、ヘヤバリがしてあって、その中へ入ると漁師にどなられた。フカンドへいくとカキダシで鮎をとったりな、（泳いでいる鮎を水中でひっかける）これは小川に沢井伝次さんという名人がいる。福生では松本さん（理髪屋）が一番だろう。

○戦後になって、米軍が横田基地の建設でどんどん多摩川から砂利をはこんだ。それはすごい勢いではこんだものだ。それから川が徐々に変わっていった。

でも、そのころも永田橋附近、多摩橋の下などいい泳ぎ場だったし魚つりもできた。最近二、三年だね、こんなになったのは。

せめて川辺の風景は

川は荒れてみるかげもなくなったけどね、川岸の自然はかなり昔のままになってますよ。せめて、それくらいはこれから保護に力をいれてもらって、多摩川の思い出を残してもらいたいですね。

多摩川がゆくえふめいです。

（一九六五・八）

――子どものあそびばはなくなるばかり――

〃その名もゆかし多摩川の清き流れのほとりなる〃

これは、福生第一小学校校歌の一節です。

その清き流れの多摩川に、この夏は、子どもをなるべく近づけない方がいい、というおとなの声があります。

じゃりあながあってきけんだ、水がきたない。

でも、近くに多摩川があって、自然にしたしむ夏休みだというのに、それでは子どもがかわいそうだ、とも思います。

ある日、ある学校のPTAのおじさんたちといっしょに、その多摩川を見にいきました。まず多摩橋のところからおりてかみへむかい、かわらのまんなかにある水たまりのようなところへいきました。

そこで気がつくことは、かわらにじゃりがないのです。水の近くにいくと、沼土がぬるぬるしていました。そのふきんにある大小の水たまりは、ほとんどじゃりあなのようで、水辺から長いさおを入れてみると、急に深くなっているのがわかります。

水は青黒くにごって、草のようなものがなかにふらふらみえます。浅いところに石をなげると、ドボンという音のあとは黒い水けむりでしばらくにごっていました。

川なら流れているだろうに、ここらは、沼というのか水たまりなのか、どろっとした水がきみわるくたまっているだけです。

でも、魚はこの中にうんといるそうですから、釣りにはおもしろいところなのでしょう。

永田橋から柳山の下には昔の清流のあとのような流れの部分がありますが、ここらは川らしいところでしょうか。

柳山のちょうど反対がわ、秋多町よりのかわらには、じゃりを山のようにつんだ、工事場がみえました。

PTAのおじさんたちは、ここでこういう意見になりました。「川じゃあないな、沼だな」

「子どもだけじゃあ、とてもあぶなくてよこせないや」

「おとながついてきて、あぶないところへ近づけなけりゃあ、いいだろう」

「こう水がねえのなら、ここらを平らにして、子どもの遊びばをつくれねえものかな」

「流れてるところに、ときによっちゃあかたまりの汚物なんかも流れてきたり、どすぐろい油が浮いてたりしてるんだから、この辺で水の中へ入って遊ぶなんてえの夢になったなあ」

まあめんじ

（一九五八・六）

田村　よね子

昔は、福生は養蚕業がとてもさかんでした。

今の福生病院は、繭の蛾の検査をするところでした。種を産ました後の蛾を、顕微鏡で見て

病気のある時は、種紙（卵を生みつけた紙）を全部集めて、焼いてしまうのだそうです。

此処へ通っている娘さんは、皆袴をはいていました。学校の先生も、洋服を着る人はまれで、和服で袴をはいていました。

学校に講習があって、他校の先生方がこられた時は、よく間違えて挨拶したものです。

その頃、蚕の盛んなところは砂川や、福生では原ケ谷戸でした。私の近所の小母さん達も、早起きでお弁当を持って、繭かきに行ったものです。私も夏休みには、ときどき連れていってもらいました。今ではまぶしも改良されていますし、繭の綿をむくのも機械でしますが、その頃は、藁でつくったまぶしの中から、一つひとつ取り出して、きれいに綿をむいたものです。指にそそくれが出来て大変痛くて、途中でやめたくなりましたが、砂川にゆくと、おやつに西瓜がいっぱい食べられるので、それが楽しみでがまんしました。僅かでしたが、繭かきのお金をいただいた時は、鬼の首でも取ったような気持でした。自分で働いたお金で、学用品を買った嬉しさもまた格別でした。

私のお友達も、皆繭かきに行ったり、子守りをしたりして、よく働きました。五年生くらいになると、軽身で遊ぶのははずかしいようでした。私は家に赤ん坊がいないので、近所で借りて子守りをしました。こう書いてまいりますと、大変温和しい良い子だったようですが、なか

なかわんぱくな時代もありました。

姉が三人いましたが、私の物心つく頃には、皆お嫁に行ってしまいましたので、兄三人、弟一人の間にはさまって、男の子のような生活をしました。男の子と女の子と遊ぶと「男と女とまあめんじ」なんていじめられた時代でしたが、私は平気で男の子とキャッチボールをしたり、木登りをして遊びました。

ある日、木登りをしているところを受持の先生に見られてしまって、成績が悪くなりはしないかと、心配したこともありました。

火の見櫓が、駅前通りの墳水のところにあった時、男の子に「登れるもんか」といわれたのが口惜しくて、夢中で一番上まで登りました。さて登ったものの、下をみると怖くて、降りる時は命がけでした。

こんなお転婆でも大変臆病なところもありました。銀座通りも今では、夜もネオンの美しい賑やかな通りになりましたが、そのころは道の両側は、ずっと畑でした。普通の畑のところどころに桑畑があって、桑の葉のある頃は、夕方などとても一人では通れません。牛浜のお友達と遊びすぎて、やむなく通る時は、オバケが出てきたらぶっつけようと、小石を両方の袂に入れて、本町まで駈け通しで帰ったものです。今の子供さんにオバケなんていったら笑われます

が、私の子供の頃は、オバケがいたらしいのです。そして一番こわかったものです。

お祭りのしたく

（一九五八・八）

田村　四郎

今でもそうかも知れないが、今から二十二、三年ぐらい前は、子供のたのしみの種類がごく少なく、今のようにすぐ映画にいけるというようなことも出来ず、自然の山や川を相手に遊ぶことや、毎年決ってめぐってくる行事、お正月だとかおぼんだとか、お祭りだとかが子供にとって最大の楽しみであった。

お祭りは中でも最大のものであった。お祭りといっても、当日はもちろんであるが、したくをする間に、いろんなことがあった。頭にのこっていることの一つ二つを記してみると。

お祭りには景気をつける太鼓がなくてはならない。この太鼓のたたき方が、いろいろとむずかしいリズムがある。これの練習があるわけだ。けれども、太鼓をたたくためには、バチがなければならない。まずこのバチを作ることだ。そのころ、横田基地のあるところは子供心に

は、そのむこうには、村や町などないと思われた程の雑木林であった。この雑木林が、バチの生産地だ。というのは、バチはねむの木で作ったのである。で、ねむの木の手頃のものをここへ取りに行くのだ。当時の私達は、今のような洋服でなく、着物で、おび（さんじゃくと言った）の黒いのをしめて下駄ばきだった。腰へノコギリやカマなどさして出かけた。

「あったぞう！」と大きな声が聞える。すると、みんな声のところに集まる。そして、切りにかかるわけであるが、バチは、手に持てる程度の細いものでよいわけであるが、そこは子供のこと、スリルと冒険を好み、人の迷惑など考えない。太い枝を切り落したり、時には、根本から切り倒す。バラバラと隣の木の葉とすれ違う音、ザーと、夕立のような小枝のすれる音、ズシインとすっ倒れる音、私たちは手を打って大声をあげた。木が倒れると、ちょうど使いよいところをとって、次のねむの木を求めて進んだ。だから、一本の木から二、三本しかとらなかったこともある。切りとったねむの木は、ていねいに皮をはいで、切り口はナイフで角をとり、丸味をつけた。太鼓の皮にきずがつくからである。

さて、太鼓のバチが出来ると太鼓たたきの練習が始まる。

その練習は、夕方から始まる。当時は、中学というのは町になく、小学校の最高学年に、高等二年という学年があった。毎年お祭りには、この高等二年生がいろいろと下級生の指導に当

った。みんなは高等二年生のことを大将とよんだ。

下級生は一生けんめい太鼓たたきを練習するわけであるが、なかなかうまくたたけない。すると、大将にしかられる。大将にしかられるというのは、先生に注意されるよりこわかったものだ。さてひとしきり太鼓の練習が終わると、今度は度胸だめしだ。太鼓のバチが、ちょうど、リレーのバトンのような役目になる。でかける前に大将が、

「俺がゆんべ、便所へおきたらなあ、俺の家は便所が外にあんべえ、外は真暗だったんだ、それで、とても静かで、あにも聞こえなかったんだよ、しょんべんが終わろうとしたときに、コツコツて音が聞えてきたんだ。すると、突然、こんだガチャガチャというんだ、俺はびっくりして、しょんべんがとまっちゃったんだ。そして家へとびこんだ、でも、そうッと首をだしてみたら、おめえあんだったと思う」「あんだかわかんねえや」「おまわりさんだったんだ」

(おまわりさんはその当時はサーベルをさげていた)

「どうだおっかねえか」

「あんだ、おまわりさんじゃおっかなかねえや」

こんな話を聞かされる。口先だけは強いことを言うが、これからいろいろのことを連想して、自分でこわいものを作りあげる。

宮本橋から出発して、おほりのむこうにある地蔵様は、よく使われた。大将はあらかじめ、相談をして、白い布や、ふろしき、音の出るものなどをもって、地蔵様へいく途中のおおいかぶさるような木の枝にのぼり、下級生のやってくるのをまった。来ると白い布を急にぶらさげたり、いやな音を出したり、急に木からとびおりたりしておどかした。下級生は、大声をあげてにげたり、中には、むかってきたり、なかにはああんだ大将かなんというのもいた。

下級生もいやいやながらも、結構やった。こんなことが、お祭り当日の役目を決めるのに使われた。つまり、みこしかつぎ、サカキ、タイコたたき、マンド、はやしなど。下級生にとってみれば、年の一度のお祭り、派手なまた重要な役目がほしいわけだ。

今から考えると、納得のいかないようなことだらけであるが、新しい世の中へ、変わる前の福生の町の子供の一つの姿だった。

日本の敗戦前後

(一九六九・二)

出席者　(敬称略)

榎本　令秀　　設楽　武男
村野　　忠　　森田　崇旦
山木　民夫　　吉田　宗市

○生まれは昭和六年と七年です。
○小学校入学が十三年、六年生卒業が十九年です。
小学校一年生の時の先生が榊先生と木崎先生。二年生が高柳先生。三年が千葉先生と浜野先生。四年が有賀先生と土肥先生。五年と六年が竹島先生です。

大東亜戦争開戦

○俺たちが四年生のときだ。大東亜戦争がはじまったのは。それまで、支那の大陸で戦争を長くやっていたので、もうその何年も前から戦争のことばかり教育されてきたんだな。
学校へいく時。正門のところからご真影の方を向いて最敬礼。いまの子どもは最敬礼なんて言葉知らないでしょう。
○埼玉県の豊岡に陸軍航空士官学校があって、そこへ天皇陛下がよくきたんだ。いつも春先き

戦中そだち

だったから、卒業式か何かだったんだろう。
全校生が先生に連れられて、八高線の線路のわきへ三時間ぐらい並んで待たされて、通るときはサーッと通ってしまって。
○あのころは天皇陛下は神様で、だから我々は汽車が通るとき、そっちを見るとばちがあたるといわれていたんだ。でも俺はそっと首をあげて見たよ。だけんどよく見えなかった。
○シンガポールの陥落。山下奉文大将の話など、はでに扱われたからなあ。
○だから俺たちの遊びは戦争ごっこばかり。
竹で作った鉄砲でカンシャク玉をパチパチやっただろう。それとガスだいほう。あれはもうそう竹の中をくりぬいて、カーバイドを入れて水をつぐとガス状になる、それにマッチを入れるとでか

い音がしたんだ。今、すずめおどしに使っているやつだな。あれで両軍に分かれて十二天の占領ごっこなんかやったな。

○あのガスだいほうでマッチをつけられねえやつは弱虫の代表で仲間はずれにされたんだ。

○中福生の子どもにとっては、戦車ごっこのほかに、清厳院がいたずらごっこの本拠だったな。

○お寺の池の鯉が実によく釣れたんだよ。

ながしばりにかつ糸で、かれっ葉なんかつけただけで鯉がぱくっと食いつくんだ。でかいのがかかるから子ども一人ではどうしようもなくて、釣ったのを始末するのに困ったよ。

○池のそばの弁天様のびわ木に登って、びわをとったりなあ。あそこはつつじなんかの植木がいっぱいあるから、かくれるのにもつごういいんだ。

○あの鯉も、戦争末期は、俺たちのいたずらとちがって本当に食糧のために釣っていた人がいたようだな。

○四月八日の花まつりを思い出すな。大門のところに、たいていお店が二軒出て。紅林なおさんの店がいつも出てたよ。

○なおさんの店は、なつかしいなあ。

戦争激化

○我々がふつうに学校にいって勉強ができたというのは、小学校六年生までだったな。それからは小学校に残ったものは高等科になっても全然学校へなんかいっていられなかった。

朝からすぐに飛行場の方へいったよ。

○兵隊と同じことやらされたわけだよな。

誠明学園のところに気象教育部の分室というのがあって、俺はそこへいかされた。そしてモールス信号を習わせられてよ。

○あのモールス信号で、〃アーユートコーユー〃って習わせられたのと、ツーツトツーツーで習わせられたのとあったな。

○なかなかあれがぱっとこないんだよ。

○朝は整列させられて軍人勅諭というのをやらされたっけ。これを覚えておけば、兵隊にいって楽なんだぞ、なんて下士官にいわれて「一つ軍人は忠節を尽すを本分とすべし」だけどもう忘れちゃったな。

○俺は予報班で、気象台から暗号電報がくるからその予報の暗号をといて天気図をつくらせら

れたよ。
○一クラス下の者は、富岡光学へ行かされたな。そして俺たちの方の女子は片倉工業へいってたよ。片倉だって軍需工場になってたんだ。
○俺は六年を終えてから私立の中学へいったんだけど、やっぱり学校なんかいかなかったな。昭島市の昭和飛行機へまわされてそこで飛行機づくりですよ。九九式艦爆機というやつの燃料タンクのとりつけや機銃のとりつけなんてやらされたよ。あの飛行機の中はもういっぱい配線と器械があってよ、パイプもごちゃごちゃしていて、それへとりつけるわけだけど、よくやれたと思うな。
はじめは一ヵ月に二十機ぐらいつくれたらしいけどそのうちに二日に一機なんてなったらしい。資材がなくて、風防をつけられても機銃がなかったりで、翼なんか板を使ったりしたらしいよ。
七月（二十年の）になったらB29がおおっぴらに空襲にきて、それを迎えうってきずだらけになった戦闘機の修理専門だったな。
とにかく、警戒警報がなると滑走路にある飛行機を急いでかくすわけだ。そして、ベニヤ板でつくつたオトリの飛行機をつなで引っぱってきて滑走路へ並べるんだ。

ところが意地の悪い兵隊がいてな。そんな時に度胸づくりだなんていって、滑走路のところへ我々を大の字に寝かせるんだよ。
そして空襲警報になるとすぐにP51の戦闘機がくるんだ。パラパラとみんな必死になって防空ごうへ逃げたよ。
○そうだ、P51って速かったな、みつばちを散らしたようにとんでくるんだろう。ズングリのグラマンも今になると懐しいなあ。
○その滑走路から逃げる時、国立中学の子が射たれて死んだのを見たけど、射たれた瞬間は、くるくるって人間がこまみたいにまわっちゃったね。
○俺もこの上の飛行場のとき、深川の方が空襲でほとんどやられちゃって、そこへ焼け残りの物資をトラックでとりにいったよ。木炭車だったな。東京を通ってその時びっくりしたよ。まだ燃え残りがくすぶって、そこらに死体がごろごろしてたな。
○俺は六年から二中（立川高校）へいったんだけど、俺たちは南多摩の弾薬庫へいかされました。火薬を乾燥させたりして、弾薬づくりだったんだろうけど、当時は夢中だったからいくのをなんとも思わなかったけど、いま思い出してもぞうっとしますよ。
○あのころ、俺たちも給料もらったな。三円だったと思ったな、それを学校であずかって貯金

しといてくれて。
○俺は中学だったけど五円の月給だったな。

町の中

○熊野橋のそばのお墓の続きのところへ、かまぼこ兵舎ができてて、そこに兵隊がいただろう。
○あそこの兵隊なんかも、二十年になってからはこの戦争負けだな、なんていってたな。
○毎日、空襲されてたものな。
○ラジオで京浜西方に敵機、なんていうと、まもなく富士山の西の方へ飛行機が見えたよ。
そして、あっという間に機銃掃射だものな。
○機銃でやられるとパラパラと薬きょうが落ちてきて、それを拾ったなあ。
○B29がきて宣伝ビラをいっぱい落としただろう。
「一書を呈す、ハリー・S・トルーマン」なんて書いてあったな。
「日本政府が悪いのであって、皆さんが悪いのではない」なんても書いてあったな。早く降伏しろといったことなんだろう。

○俺もそんなビラをいっぱい拾ったよ。そしたら先生にすぐとりあげられちゃった。
○八月一日のお祭りの日に八王子がやられたでしょう。あれだって予告してやったんだよ。そして八王子の次は福山をやるとか書いてあったんだ。その福山は福生のまちがいだろうというわけだ。それで福生の人も大さわぎしちゃったんだ。夜中に中福生の通りを手車やリヤカーで荷物を積んだ人が一杯だったな。おふくろが前をひいて子どもが後おしして、ふとんなんか山のように積んで多摩川の方へ避難したんだ。
○砂川へB29が落ちて、みんなでかけ足で見にいったよ。尾翼が落ちてて、そのそばに乗員が真黒こげだったよ。手や足なんてわからない、真黒な丸い死体になってたな。
○そういうのを見ても、おっかないなんて感じなかったなあ。飛行場にいる時だって、防空ごうの中なんかで兵隊の方がこわがってたんじゃない。こっちはこわいもの見たさで、ときどき防空ごうから首を出したりしておこられたよ。
○空襲になって泣き出すのなんかいなかったな。
○俺も砂川の方へ学校からまわされてたけど、空襲になると家へ帰れっていうから、喜こんでたな。砂川の道をいつも歩って帰ってくるんだよ。
○山本五十六元帥が戦死しただろう。あの日の朝、学校の朝礼で校長先生が、「きょうは重大

なできごとがあった。なんのことか知っているか」という質問を生徒にして、だれも答えられなかったんだ。そしたら、全員校庭へすわらせられて、その山本元帥の話を聞かされたこともあった。

○もうそのころは運動会だって軍事色ばかりだったな。徒競走や障害物も、一致団結なんて種目にしたり、女生徒はなぎなたをふるったり。

敗戦の日

○俺は、天皇の放送があるからって聞いてたけどあんまり暑いから多摩橋の下で泳いでた。そしたら通った人が、日本は負けたらしいなんていったんだ。

○俺は家でその日に防空ごうを掘ってた。そばに町会の人の詰所があって、防空ごうがせまいのであと一つ掘ろうということだったんだ。掘っているうちに天皇の放送だっていうんで聞いてたら、その時はなんのことだかわからなかった。

敗戦のあと

○学校ででかい穴を掘って、いろんなもの埋めたっけ。訓練でつかった小銃や、銃剣術の道具

や、剣道の面なんかもみんな埋めちゃったな。米軍がきて見つかると大変というわけだったんだろうな。

○とにかく俺たちは学校で勉強なんてやっていられなかったんだよ。俺はそのあと、小学校を卒業してから働くところがなくて大変だった。

だから農家の作男なんかしばらくしたけどつらかったなあ。

○俺たちより十歳くらい上の齢の人は、大勢戦死者が出たんだな。俺たちの同級生で戦死者なんか出なかったけど、とにかく戦争、戦争で、勉強どころじゃなかった。

○だからわれわれのわんぱく時代というのはなかったよ。みんなで遊べたのは、小学校の五、六年生ぐらいまでだ。それからはもう、遊ぶどころか。兵隊みたいなものだったものな。

（終）